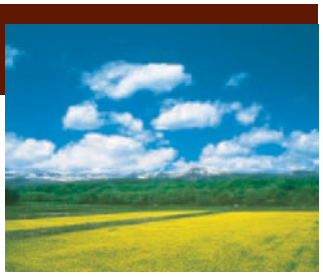
奥州市　力強い農業をつくる「懸け橋」に

農業委員会だより



第11号

【発行日】平成23年７月28日
【発　行】奥州市農業委員会だより編集委員会
【印　刷】株式会社正和印刷

この度の震災により被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

会長挨拶

奥州市農業委員会
会長　佐藤　清信

３月11日の震災におきまして、甚大なる被害を受けた方々には、謹んでお見舞い申し上げます。

平成20年６月14日の岩手・宮城内陸地震では、胆沢区、衣川区の被害が多かったところですが、４月７日の余震を含めた被害について、５月に農業委員及び事務局により区ごとに精査したところ、江刺区を始め、市全体の農地被害が甚大であることを痛感したところでございます。

今後の復興、復旧対応につきましては、市はもとより、県、国への要望を行うところです。

また、農業委員会系統組織では、復興の足かせになるＴＰＰについて、参加中止の検討をすべきと求め、反対署名運動を行っているところですので、皆様方のご意見、ご要望等がありましたら、地区農業委員又は事務局へご一報いただきますよう、お願いいたします。

東日本大震災の復旧に関する要望書を市へ提出

7月13日佐藤農業委員会会長ほか会長職務代理者、各部会長及び部会長職務代理者が市に対し、東日本大震災の復旧に関する要望書を提出しました。市からは小沢市長を始め、後藤副市長、高梨総合政策部長、菊池農林部長が同席しました。

佐藤会長が「我々農業委員には、農業者の代表として、その声を行政・政策へ反映させる重要な任務を課せられております。奥州市の農地・農業用施設の災害状況の現地調査を踏まえて、5つの項目にわたり要望をいたしますので、農業者が意欲をもって農業に励むことのできる復旧を切に願い、特段のお取り計らいをお願い申し上げます。」と話し、市長に要望書を手渡しました。

これに対し市長から、災害復旧支援事業、放射線情報周知等の現在の状況について説明がされ、引き続き、今後の対応についての意見交換が行われました。

なお、要望書については、後日回答をいただくこととなりました。

市長へ要望書を提出

要望書提出後の意見交換

東日本大震災の復旧に関する要望書

東日本大震災から4箇月が経過し、この間、奥州市を始め、関係各位が献身的な復旧対策に全力で取り組まれていることに対し、深く敬意を表するものであります。

こうした中、奥州市農業委員会としましても、この未曽有の大震災に対し委員による奥州市の農地・農業用施設の災害状況の現地調査を去る5月25日から5月31日までの間実施いたしました。

広範囲かつ多岐にわたる深刻な被災状況であることがわかり、なお一層被災農業者が安心して農業を営めるよう、このような状況からの脱却に向けての復旧を図り、市の基幹産業である農業の保全のために、また、農業者の生産意欲を保持するために、次の事項について円滑な対応を講ずるよう要望いたします。

併せて国、県に対しましても同様に係る事項について、被災農業者から委員に多数の要望が寄せられていることから働き掛けを強く要望いたします。

1　被災した農地・農業用施設の災害復旧事業の拡大策

災害復旧事業は、測量設計費用が対象外であることから復旧に当たる農業者の負担が大きく、これにより復旧事業を断念し、結果耕作放棄地に

農政部会で要望書の決定

結びつく可能性が大きい。これを防ぐためにも農業者の負担軽減となるよう測量設計費用に対する措置を講じること。

2　被災した農地・農業用施設を自力復旧した農業者への支援策

農地及び個人が所有する水路、ため池、耕作道等に被害を受け、自力復旧した農業者に対する支援措置を講じること。

3　正確な放射線情報の周知策

信頼される正確な情報が、風評被害を及ぼさない最も基本的な対策であります。奥州市の農畜産物の高い評価を維持するために、正確な放射線情報の周知策を講じること。

4　放射能風評被害への対策

今後、農業者が風評等により、農畜産物の出荷に際し減収が生じた場合、再生産可能な経営支援としての減収補てんを講じること。

5　被災農業者への戸別所得補償制度支援策

今年作付けできなかった被災農業者へ、所得補償制度支援策を強く国に働きかけること。

江刺区玉里六百刈田沢の水田のクラック、畦畔・法面の崩れ

胆沢区小山沢田の水田の田面亀裂・沈下

女性農業委員コーナー

【水沢区】菊地ナミエ　委員

皆様こんにちは。地域の方々、農業委員の方々のご指導、ご協力のもと、奥州市農業委員を勤めさせていただいております菊地です。

農業を取り巻く情勢については、昨年は、今までにない位の米価の下落、TPP問題、更に政策情勢が変わる等さまざまなことがありました。しかし、私たちが農業に携わる上で、とまどいながらも、これからもずっと米作りをしていかなくてはなりません。

地元は、昔から水稲が盛んで、「ひとめぼれ」は、日本穀物検定協会の米の食味ランキングで16回「特A」の評価を受けている米どころです。次世代を担う子供たちのためにも、安心、安全な食べ物作りを目指し、更に、自給率向上を目指し取り組んでまいりたいと思っています。

次に、私たちが推進しております農業者年金についてご紹介いたします。

〝しっかり積み立て、がっちりサポート、安心で豊かな老後を〟のキャッチフレーズのとおり、輝かしい老後にしたいと思いますね。この農業者年金は、素晴らしい年金です。将来のことを考えると、家族一人ひとりについて準備することが大切だと思います。なお、保険料の額については、自由に決めることができます。

このようなお話を理解してもらえた方に、農業者年金に加入していただいています。本当にありがとうございます。

今年も一人でも多くの方に農業者年金に加入してもらいたいと願い、頑張っています。

皆様、これからもどうぞよろしくお願いします。

農地パトロール

（利用状況調査）を行います。

期間は、８月から１１月まで

農業委員及び農業委員会事務局職員がパトロールを行います。

農地法が改正されて、年１回以上農地の利用状況を調査することになりました。また、遊休農地に対する指導も強化されました。

農業者年金は農業者だけのもの、作業で身体、年金で心を健康に

各地区から…

水沢地区

農業の担い手「田植え体験」

今年で11年目となるわんぱくでんでん（田・伝）教室の田植えが5月11日に水沢区真城地内で行われました。

これは、奥州市立真城小学校、真城公民館・地区センター及び子供会育成会連絡協議会の団体と地域が連携し、田植えや稲刈りなど、農業体験を通じて、地域住民と世代交流しながら、米作りへの理解を深め、食の大切さや労働の大切さを学んでもらうものです。

農家の子供でも今ではなかなか田植えを手伝う機会が少なくなっており、真城小学校の5年生の児童57人が総合学習の中で取り組んでいるものです。

雲南愛農会（代表小野寺勝志氏）のみなさんに協力を頂き、泥に足を取られながら、1時間程度で田植えは終了しました。

この中から、将来の若き農業の担い手の誕生を願うものです。

江刺地区

りんごの種と共にあゆむ

～JA江刺りんご部会青年部育種活動～

去る5月13日にJA江刺りんご部会青年部員（佐藤英雄部長、会員19名）によるりんごの播種が行われました。いつもの集合場所となっているJA江刺の園芸センターは、大震災により被災しているため、隣接する選果場の軒下での作業となりました。

この活動は、青年部独自のもので、りんごの新品種の育成を目的としており、今年で3年目の取組となっています。

作業に当たったのは、各地区のりんご生産の担い手である20～40代の部会員で、各自が持ち寄ったりんご種子を一粒ずつ丁寧に播種していました。

たかが種をまいて水をやるだけですが、1年目は部員の半数以上が育苗に失敗しました。その後、互いにコツを教え合い、徐々に要領よく育苗できるようになりました。現在では、ふじ、シナノゴールド、はるか等の種子から得られた実生苗は、100本以上になっています。

今後は、育苗した実生苗から穂木を採取し台木に接ぎ、定植数年後の結実を見て、熟期や外観、味等から有望品種を選定していきたいとのことです。

これら一連の作業は、りんご栽培の基礎知識を得ることも兼ねており、青年部員の参加率も良く、佐藤部長は、「この取組の一番の趣旨は、各地区にいる若手の育成であり、新品種の育成はその次。現在の青年部会員の大半はUターン組で栽培知識がまだまだ身に付いていない。この育種の作業を通じて、基礎知識を身に付け、りんご生産の担い手として成長していければ」との思いを語ってくれました。

「江刺りんご」が誕生して早30年が過ぎようとしていますが、各地区に熱意あふれる若い担い手がいて、共に集い活動していることを大変心強く感じ、地域農業の更なる発展を確信するものでした。

前沢地区

前沢区 日本一の前沢牛

平成22年度全国肉用牛枝肉共励会（東京食肉市場株式会社主催）において、前沢区の阿部育男氏が出陳した「前沢牛」が、17年ぶりに最高位の名誉賞に輝きました。通算すると名誉賞の獲得は5度目、全国規模共励会での農林水産大臣賞は9度目となり、他ブランドを圧倒する成績となっています。

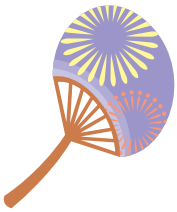
さらに、前沢区を範囲とする岩手ふるさと農協肉牛部会前沢支部（鈴木松雄支部長）は、前沢牛を機軸とした6次産業化など地域おこしへの貢献や、30年変わらず国内トップブランドを維持してきたことが評価され、平成22年度第40回日本農業賞「集団の部」大賞を受賞しました。

これらの快挙は、支部分会を単位とする生産者自らのたゆまぬ努力と岩手県、奥州市、JA岩手ふるさとなどの連携した事業展開、関係機関で構成される岩手前沢牛協会による流通対策及び推進の賜物です。生産者間の切磋琢磨、地域内一貫生産、耕畜連携体制などの生産振興策、岩手前沢牛協会やJAが中心となる流通販売対策は、畜産推進員制度・出荷談話室の設置や前沢牛イベントなど、渾然となった諸施策として構築され、連綿と引き継がれてきました。

現在、所得弾力性の高い牛肉は、経

済の低迷により、ＢＳＥ以来の相場下落と飼料高の中にあって、前沢牛ブランドとしての差別化が単価に反映しているとはいえ、非常に厳しい肥育牛経営を強いられております。

この度の名誉賞と日本農業賞大賞のダブル受賞は、文句なしの日本一「前沢牛」と誇れるものですが、同部会では驕ることなく、枝肉最高格付けＡ５ランク率の更なる向上を目指し、将来に向けた試金石とするよう研鑽を重ねることを誓い合っています。



胆沢地区

直播栽培に取り組んでいます

胆沢区小山の二ノ台集落。圃場整備された大区画の水田を1台のトラクターが進みます。機械の後ろはきれいに土がならされ、一見田植え前の代かきに思えますが、代かきローダーに取り付けられた装置からその下の田面に種籾が勢いよく投げつけられてできる、小さな水の跳ね上がりを見ることができます。これは、この地域で水稲の直播栽培に取り組む高橋重一さんの作業の様子です。

高橋さんは15年ほど前、同じ集落に住む先輩と2人で当時走り出しであった水稲の直播に取り組むことを決めました。今でこそ研究が進み技術も普及してきましたが、取り組んだ時分は先例の少ない中、まいた種が鳥に食べられたり、一面が雑草だらけになるなどして、農業普及センターや機械メーカーとは、四六時中連絡を取り合っていたと当時を振り返ります。現在6haの水稲を作付けし、うち7割を占めるヒメノモチのすべてを直播で行っているのは、和牛経営、地域の生産組合の担い手と多忙な中で、労働力の配分が行えるからとのこと。

直播は今後ますます必要とされる技術ですが、まだまだ開発の余地があると高橋さん。本紙の取材中も、研究している機械メーカーから打ち合わせの電話が入る多忙振りでした。

衣川地区

たまには農作業を早く切り上げて『講談』はいかが？

皆様、既にご存知のように平泉が世界文化遺産に登録されました！

奥州市においても、観光面などを含み多彩な歓迎イベントが催されるところであります。

衣川区内の長者ヶ原廃寺跡等の発掘結果からも明らかになっているように、平泉と衣川は歴史的に関わりが深く、また、神社の講中として、お寺の檀家の一員として今なお関わりを多く持っている家が多くあります。平泉の代表的な祭りの春の藤原まつりをはじめとする『薪能』、『二十日夜祭』等々の年中行事への歴史的、人的な関わりを持ちながら共にある地域なのです。

そんな平泉とのつながりの中で、3年ほど前から歴史好きな数人で、衣川・平泉の歴史を後世に末永く語り伝えていこうと、プロの講談師を招き『奥州義経語り』と名付けての講習会を開き、幾度となく練習を積み重ね、遂に1年前、地元の講談師集団『奥州衣川青凛会』を立ち上げたのです。

現在の会員は、女性4名を含む15名。私も拝聴しましたが、歴史物を中心に、時には恐怖の怪談話やちょっと色っぽい話など、個性豊かでわかりやすく、歴史が得意ではない私も十二分に堪能させていただきました。

たまには農作業を少し早く切り上げて、是非一度お聞きあれ！

連絡先　NPO 法人天遊塾事務局
TEL 0197-52-3750　FAX 0197-41-6201
ｱﾄﾞﾚｽ　billy@proof.ocn.ne.jp

部会報告

農地部会研修

農地部会　千葉　永　委員

農地部会の研修は、平成23年2月25日（金）に行われました。部会員19人中、12人プラス事務局の13人が参加しました。研修地は、2箇所で、企業が農業参入している所。

午前には、北上市和賀庁舎において、㈱ホクセイ建設（北上市鬼柳町）代表取締役・千田誠二氏の説明を受けました。

解除条件付貸借によって、休耕地等の農地を借り受け、グランドカバープランツ（地覆植物）を栽培。草取りや草刈りという過酷な重労働をいくらかでも軽減し、景観を保つことができるようにと考え始めたもので、まだまだ研究の段階とのお話でした。江刺区の原体集落でも、既に他社との契約ではあるが、中山間事業の中で着手しているとのことです。他に奥州市内でも取り組んでいる所が出ているようです。

農地周辺が、草花に覆われ、草刈等の農作業から開放されたなら、何と素晴らしいことだろう！と思いました。これからの研究、発展を期待します。

午後の部は、花巻市大迫町の森田建設㈱（森田敏雄代表取締役）が、同町の基幹産業でもあるぶどう生産に参入したもの。県の「いわて希望農業担い手応援事業」を受けて、同町に園地を整備。平成22年度から本格的に醸造用品種の栽培に取り組み、後継者不足などで、栽培面積が減少している地域の基幹産業活性化を目指しています。総事業費は、4千600万円余りで、県が総事業費の半額、市も一部を補助。栽培品種は、全て醸造用で、高級ワインの原料となり、収穫後は、同町のエーデルワインで醸造し、商品化します。栽培管理は、関係機関の指導を受けながら、ぶどう栽培の経験のある地元の農家を雇うとともに、市シルバー人材センターへの作業依頼も予定しているといいます。

耕作放棄地の解消、地元労働力の活性等々、期待される農業参入であると感じました。

登米市農業委員会との交流研修会を終えて

農業振興部会　髙橋　直志　委員

去る2月23日（水）、少し足を伸ばして宮城県登米市農業委員の皆様と親しく話を深めてまいりました。

登米市の農家戸数は1万1千500戸余り、うち認定農業者が950経営体、特定農業法人が2法人、特定農業団体が9団体と、数字の上では奥州市とほぼ同じような規模と言えますが、大きな違いは農地が平坦な場所にあり、そのほとんどが大規模圃場で占められているという、広大な水田が整然と並んでおりました。

そんな条件内での登米市農業委員会は、奥州市と同じ48人、市内を3つの区域に分け、一地域ごとに農地部会長と職務代理を置き、さらに3つの区域内にはそれぞれ、会長と会長職務代理、農政部会長と職務代理、そして農業振興部会長と職務代理が入るという構成でした。

さっそく互いの農業振興部会の活動内容を紹介し、話し合いのテーマを農業経営基盤強化促進法による進捗状況、担い手育成と婚活支援、農業作業労賃標準額の設定方法についてを取り上げ、双方から日頃の委員会活動の中での問題点、改善点、日頃思っている事など、活発な討議を交わすことができましたし、また共有できる部分も多く、大変心強くも感じました。今後の委員会活動を進めていく上で大変参考になりました事は言うまでもありません。

今回の私たちの研修のために登米市農業委員会の皆様には、日程調整等々、大変なご迷惑をおかけいたしました。ありがとうございました。

企業の農業参入事例を見て

農政部会　小澤　司　委員

改正農地法により企業の農業参入が可能になり、農業委員会農政部会では二つの事例を視察しました。いずれの企業も農業あるいは地域振興に対する強い自負を感じました。

建設と産業リサイクルを営む花巻市の成和建設㈱は、事業減少に伴う雇用維持を目的として社長の農地4haと受託水田など約35haを営み、約100名の職員のうち30名が営農部分を兼務しています。嫌がらせの被害もありましたが、現在は、広く荒廃農地の減少に貢献し、地域の期待も大きいようです。特徴的には、払下げのライスセンター・中古農機の整備や、圃場整備に社員の特技と会社の重機を活用して経費節減に努めていること。生産面では、水稲を中心に雑穀の生産を手掛けています。

合宿型自動車学校の遠野市の㈱高田自動車学校も、閑暇期の雇用維持と人口減少への危機感からトマト（2棟）、水稲56aを営んでいます。馬産地の副産物・馬ふんを活用した無農薬水稲は、「馬米（うまい）」と命名して地域PRにも努めています。無農薬栽培の拡大に意欲的で、需要は予想以上であるといいます。農業への着目は、世界的な食料不足に対する必要感と社員、来校生の農業体験の意義深さからとのこと。農政は、対処療法が実態で、自給率を高める将来展望を見極めていないと厳しく、行政事務でもスピードを求めています。

農村振興に係る農業と食料生産の重要性を強く認識し、雇用も維持し、いずれも大きな投資と知恵と工夫を凝らしているにもかかわらず利益には至っていません。今の価格では、農村も農業も将来への不安は拭えないと感じました。

農業者年金加入者からのコメント

【水沢区】高橋智也さん（35歳）
平成23年2月農業者年金加入

私は、平成21年に認定農業者の認定を受け、現在、果樹（りんご）1・5haを経営しております。年金加入から3年以内に青色申告者となることで、政策支援（2割支援）での加入をしました。

加入して良かった点は、何といっても〝老後の備え〟です。今は、農産物の価格が不安定のため厳しい状況ですが、今後は、加工・販売にも目を向けて消費者のニーズにこたえるような農業を目指していきたいと思っております。

～新農業者年金の特徴～

☆　農業従事者なら誰でも加入できます

６０歳未満の国民年金の第１号被保険者であって年間６０日以上農業に従事する人であれば、誰でも加入できます。

☆　保険料に国庫助成があります

認定農業者など、一定の要件を備えた意欲ある担い手に対して、保険料（月額２万円）の２割、３割又は５割の政策支援（保険料の国庫助成）があります。

※　助成を受けた分の受給には、後継者へ経営継承する手続が必要になります。

☆　保険料は自由に選択できます

月額２万円から６万７千円までご自身のライフプランに合わせて自由に選べます。

☆　税制面で大きな優遇があります

保険料は、最大８０万４千円の社会保険控除（納めた保険料の１５％～３０％程度の節税）があります。支払われる年金にも公的年金控除が適用されます。

☆　８０歳までの保証がついた終身年金です

年金は、終身受給できます。加入者や受給者が８０歳になる前に亡くなった場合は、８０歳までに受け取ると仮定した金額を死亡一時金として遺族が受け取れます。

幸せな老後には「健康」「友達」「自由に使えるお金」が必要です！

農業者年金に加入して、老後は、時間にもお金にもゆとりある生活を送りましょう。

経営移譲年金を受給している方へのお願い！

経営委譲年金は、後継者等へ農業経営を移譲されたことにより支給される年金です。

受給者は、次の事項に該当すると年金の額が少なくなったり、受け取れなくなりますのでご注意願います。

①　農地等を後継者等へ貸出ししていたが、契約期間満了により受給者に農地が戻ってきた場合
②　農業経営を再開した場合
③　農業生産法人の組合員、社員又は株主になった場合
④　後継者に貸し付けた農地等が一部でも後継者以外の者に使用収益権の移転又は設定がされた場合

などです。

詳しくは、お近くのＪＡ、農業委員会事務局、農業委員へお問い合わせください。

光陰は矢よりも速やかなり、さあ、老後の備えを始めましょう

〒029-4292 岩手県奥州市前沢区字七日町裏71番地 奥州市農業委員会事務局 TEL 0197-56-2111

表紙写真の紹介

① 田んぼアート（ジャムおじさん・前沢牛）
② 田んぼアート（開会式）
③ 家族協定締結式
④ あじさい（あじさいロード）

皆さん、朝ごはん 食べてますか？

胆沢区渡辺嘉一委員のお宅の朝ごはんです。

ご飯、みそ汁、タラの塩焼き、プチトマトのちくわ巻き、ふきとがんもの煮物、にら納豆あえ、卵豆腐、カブの漬物。

旬の食材を取り入れ、一番おいしい時期においしいものを家族に提供できるように心掛けているそうです。

奥州市農業委員会事務局

◇本庁（前沢）　56 － 2111（284）
　前沢総合支所１階
◇水沢分室　24 － 2111（378）
　奥州市役所（本庁）３階
◇江刺分室　35 － 2111（250）
　江刺総合支所２階
◇胆沢分室　46 － 2111（143）
　胆沢総合支所１階
◇衣川分室　52 － 3111（219）
　衣川保健福祉センター内

農業委員（選任）の交代について

岩手ふるさと農業協同組合の役員改選に伴い、高橋養一委員（衣川区）から千田幸男委員（胆沢区）へ交代となりました。

よろしくお願いします。

千田　幸男（さちお）　委員
（胆沢区南幅下、荻ノ窪・農地部会）

全国農業新聞

～全国農業新聞を購読してみませんか～

全国農業新聞は、農業者の公的代表機関である農業委員会系統組織が、編集・発行している農家のための情報誌です。

購読の申込みは、地域担当の農業委員又は農業委員会事務局まで。（毎週金曜日発行・定価月六〇〇円）

道端

突然の東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所の事故、余震では奥州市内でも災害が発生した。一瞬のうちに未曽有の大災害で犠牲になった方々とご遺族の皆様に対しまして、謹んでお悔やみを申し上げます。

悲しみや、苦しみに耐えながら復興に向けて頑張っている方々、死者、行方不明者、非難生活等毎日の新聞、テレビ報道に、すぐにでも何とかしてやりたいと焦る気だけが先走る。住む場所がない、食料がない、水がない、電気がない、油がない、飼料がない、ライフラインが寸断。安心安全神話をモットーとしてきた私たちだが、これからの夏、東北地方は南風になることで、原発の被害、風評被害等が更に心配されるため、いち早い放射線対策等の解決を期待する。

今まで平凡に暮らしていた現代の日本社会で誰が想像しただろうか。しかし、つらい現実は現実です。

歴史を振り返ると、幾多の地震、津波等の試練を体験、悲惨な戦後復興の体験、その復興に対しては先人たちの知恵と大変な努力があった。地域社会のきずなを守り、ただひたすらに「家族、我が子供に腹いっぱい食わせたい」との一身で泥にまみれ額に汗して働いた。そんな親たちの背を見て育った子供たちもその行動を引き継ぎ、食料増産、経済復興へと精を出し、高度成長の波に乗りながら一生懸命努力した結果が現在の飽食の社会を生じたといわれている。

しかし月日は過ぎ、そして今年も被災地では例年の様に桜の花が咲いた。今こそ国民の力を結集して、過去の体験を生かし、いち早い復興の実現を期待する。

農業政策ではＷＴＯ・ＥＰＡ等への対応について慎重に適切な措置を講じてもらいたい。また、ＴＰＰについては断固反対する。今は自然的な感覚でなんでも外国から入ってきているが、行く末も安心安全な食料の保証はない。そして行政、医療等を含め、あらゆるものが自由化になると日本社会はどうなるのか、安易な考えでの結論には承認できない。

政府には、国民が自国の食料供給に安心できる体制づくりを今回の震災を契機にしっかり考えて行動してもらいたい。

老後の生活がっちりサポート農業者年金

編集後記

田んぼアートのジャムおじさんの「がんばろういわて」には、震災復興へのメッセージが込められていました。ご覧になってみませんか。

編集委員長　阿部　恒久
副編集委員長　千葉　政三
編集委員　和賀　顕士
鈴木　哲也
渡辺　嘉一
髙橋　直志